

## 三条大橋

片山 賢哉

(2020 年度入学 四期生)

三条大橋は三条通の鴨川に架かる橋で、中京区と東山区の境に位置する。江戸時代に整備された五街道の1つ、「東海道五十三次」の西の起点にあたる。四条大橋・五条大橋とともに本市における三大橋の1つとして、その名は世に名高い。橋の創設された年月は明らかでないが、歴史に登場するのは、古くは室町時代にまでさかのぼり、京都市の市街と郊外の景観を描いた屏風絵の「洛中洛外図屏風」には架橋の記述がある。ただし、本格的な架橋は豊臣秀吉の命により天正18(1590)年の正月、増田長盛によって行われた。

江戸時代の構造については、京都大工頭中井家に伝わる文書や絵図で詳細なことを知ることができる。橋の橋脚は円形の石柱3本建てで、21組より成る。石柱の数は63本となるので創業時と同じである。石柱の上には木製の梁が乗り、主桁は7本組みであった。橋脚の直上と梁間には2本の桁が乗せられていた。

橋長は、天正18年の架橋時に61間(約116m:1間が6尺3寸)だったが、寛文7(1557)年には64間4尺(約119m:1間が6尺1寸)に伸びた。これは洪水の関係と推察されている。その後、寛文新堤の整備に伴い延宝4(1676)年の中井家文書には57間2尺(105m)とあり、14mも短くなっている。明治に入り幅員の拡幅工事等で56間(101m)とさらに短くなり、京阪電車や鴨川運河(琵琶湖疎水)の整備、昭和10(1935)年の洪水などの関係による昭和25(1950)年の改修で、現在の74mの橋梁となった。400年前と比較して42mも短くなっている。

20世紀に入ると、三条大橋の橋脚も耐久性の高い鋼やコンクリートといった材料を用いた「橋の永久化」が行われた。現在の三条大橋は昭和25年に改築され、木製高欄は昭和49(1974)年に更新された。

石柱の橋脚や擬宝珠、高欄など当初の形状を引き継いでいるのは、鴨川に架かる橋脚では三条大橋だけである。周辺には歴史深いスポットも多く存在している。



### 石柱

三条大橋は長大橋(橋長100m以上)としては日本初の石柱橋とされている。石柱は長さが10尺(約3m)、直径が2尺3寸(約70cm)で、「天正十七年津国御影 七月 吉日」

と刻まれている。現在、40本橋脚（8列×5本）によって支えられているが、そのうち8列の下流側の橋脚の7本が石柱である。現在も当時の石柱が受け継がれているのは、文化的な側面もあるかも知れないが、経費削減を目的としたリユースの文化も関係すると言われている。その際、砂礫等の被害を受けづらく安全な、下流側の橋脚が残されたと考えられる。真偽のほどはわからないが、『京の三名橋』で田中緑紅氏が大正元（1912）年の改修で天正の石柱を全部取り替えたと言っており、天正17年（1589）年と刻まれていない石柱の製作年については不明な部分も多い。旧三条大橋の石柱は、現在も北西角に Monumentとして置かれている。よくある、楕円形の「小判型」の橋脚ではなく、円形石柱を持つ三条大橋は見晴らしがよい。景色として楽しむことができることは、三条大橋の魅力の1つであると思ふ。



### 擬宝珠

青銅で造られた擬宝珠も古く、年号が刻まれている擬宝珠としては日本最古とされる。「洛陽三条之橋至後 代化度往 還人盤石 之墓入地 五尋切石之柱六十 三本蓋於 日城石柱 橋濫觴乎 天正十八年庚寅正月 日 豊臣初之 御代奉 増田右門尉 長盛造之」と刻まれた10個の擬宝珠が使われている

（2個が「洛陽」を「雒陽」と刻む）。異なる言葉が刻まれている擬宝珠は2個ある。左岸の下流側から2カ所の擬宝珠には明治45（1912）年から昭和25年まで沿革が記され、左岸上流端の擬宝珠には上記の文字に加えて升本直一の文字が彫られている。三条大橋西側から2つ目の南北擬宝珠には刀傷跡がある。これは池田屋騒動のときについたのではないかとされている。



### 車道

三条大橋の下へ下りていく道は「車道」と呼ばれている。この車道は三条大橋を渡ることのできない牛車のために必要であった。その理由は、牛車が渡ることによって橋を傷めないようにするためである。「伊勢参宮名所圖會」などでは三条大橋の下を牛車が渡っている風景が描かれている。平安時代初期の絵図



では牛車が橋を渡っているため、それ以降の時点で牛車が橋を渡ることができなくなったと考えられる。

### 弥次喜多像

三条大橋の西側には、東海道中膝栗毛の主人公、弥次さん喜多さんの像がある。1994年、三条大橋商店街振興組合が建立。旅行の安全を祈願する撫で石も設置されている。



### 駅伝の碑

三条大橋の左岸東詰北側の交差点には、駅伝発祥の碑がある。日本最初の駅伝競争は大正6（1917）年4月27日から3日間にわたり開催された、奠都五十周年記念大博覧会「東海道駅伝徒歩競争」である。その競争区間は、京都・三条大橋～東京・上野不忍池の博覧会正面玄関の508kmを23区間に分けたものであった。この石標は、そのスタート地点として駅伝の歴史の始まりの地となった三条大橋を示すものである。



### 高山彦九郎像

土下座像と呼ばれることも多い高山彦九郎造だが、実際は土下座をしている姿ではない。高山彦九郎は、江戸時代の尊皇思想家で、三条に足を運ぶ度に御所の方角に向かって膝をついて拝礼をしていた姿が銅像になった。昭和3（1928）年三条大橋東詰に銅像が建設されたが、昭和19（1944）年に金属供出のため撤去された。現在の銅像は昭和36



（1961）年に再建されたものである。この石標は昭和19年の銅像撤去にあたり、その遺跡を示すために建設されたものである。京都人には待ち合わせ場所としてよく使用される。

### 参考文献

- 1) 松村博. 京の橋物語. 京都文庫, 1994, 240p.
- 2) 竹村俊則. 鴨川周辺の史跡を歩く. 京都新聞社, 1996, 253p.

- 3) 田中緑紅. 京の三名橋 上. 三人社, 2019, 51p.
- 4) 鈴木康久. 京の水探訪 81 豊臣秀吉が架設した「三条大橋」～世界の名橋を夢見て.
- 5) 京都市. “駅伝の碑”. 京都市情報館.  
<https://www2.city.kyoto.lg.jp/somu/rekishi/fm/ishibumi/html/hi105.html> (参照  
2023 08 10)
- 6) 京都市. “高山彦九郎先生皇居望拝趾”. 京都市情報館.  
<https://www2.city.kyoto.lg.jp/somu/rekishi/fm/ishibumi/html/hi095.html> (参照  
2023 08 10)